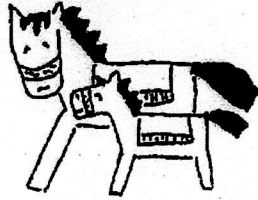


お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ



子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリ

令和7年 4月 No. 365

〒760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松第二保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<https://oumanooyako.com>



(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～

4月の主な活動

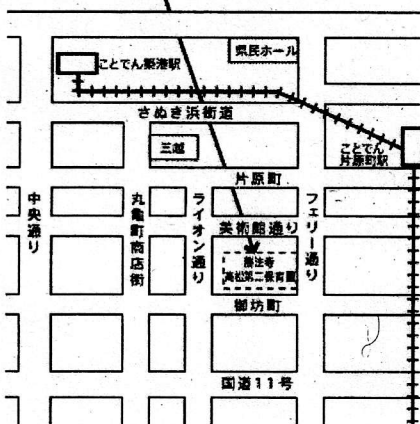
～お気軽にどうぞ～

4月	11日 25日	金	ヨーガを楽しむ会 14:30～16:00	暖かくなりましたので、身体をほぐして 転倒予防をしましょう。
4月	12日	土	おとなアート 14:00～16:00	小学生や中学生、高齢の方もどうぞ！ 色々なスタンプを重ねて短冊に藤の花を描きます。
4月	18日	金	香川みずぶさんの会 14:00～16:00	音楽療法士、社会福祉士の幸田和代さん と身体を使って音楽を楽しみます。
4月	22日	火	自然の中のあそび体験 15:30～16:30	牛乳パックの鉢に花の苗を植えます。
4月	15日 23日	火	体験保育 15:00～16:00	保育園のお友だちといっしょに遊びましょう。

・月～金の12:00～17:00までは、園内開放しています
ので、親子でご来園下さい。
(但し、土・日曜・祭日は休み)

育児相談(月～金) 12:00～17:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活、
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
地域子育て支援センター



金子みずぶ童話全集⑥
「さみしい王女・下」より

早春
飛んで来た
毬(まり)が、
あとから子供(こども)。
浮(う)いて
風(た)が、
海から汽笛(きてき)。
飛んで来た
春が、
きょうの空、
青さ。
浮いて
こころ、
遠い月、
白さ。





子ども、保育者の「成長」

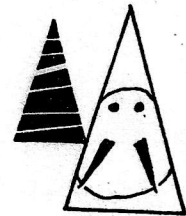
乳幼児教育実践研究科 井桁 容子

○「成長」の捉え方



心理学の実験で、たとえ、1歳に満たない乳児でも、目の前の大人がものを落とすと拾って相手に手渡す行動が見られることが証明されているように、身近な大人が困っていたり怒っていると子どもは、そのことを何とかしようとする気持ちが働きます。お父さんやお母さん、あるいは保育者が、余裕がなく困っている状況を察すると、自分の気持ちを表現することを抑えてしまうこともありますので、保育者は「手がかからなくなった」ということと成長を簡単に結びつけないように、1年間の子どもの成長を振り返りましょう。

○1年後に気づいたこと



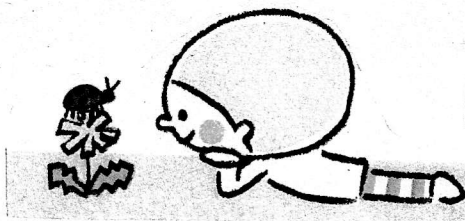
ここで、思いがけない1年後の子どもの心の成長に大人が気づかされたエピソードを紹介します。

R君(5歳)は、1年前の生活発表会のダンスの練習をしている時期に登園を渋り出しました。ある日、その気持ちがとうとう爆発して「園にはもう行きたくない!」と大騒ぎしました。お母さんは、パート勤務なので融通がつくということで、しばらくR君の気持ちに付き合ってみることにしました。理由をはっきりと言わないR君ですが、これまで一度もこのようなことがなかったのに、R君にとってはよほどのことがあるのだろうとお母さんは判断して、しばらく様子を見ることにしたのです。そのことがR君にとってはよかったのか、もともと園生活は楽しんでいたこともあり、4日目には登園して、これまで通りに登園するようになりました。ただし、生活発表会の当日のR君の様子はつまらなそうで、動きもやる気のない緩慢さが目立っていたようです。

あれから1年が経ち、今年も生活発表会がやってきました。R君は特に登園を嫌がるわけでもなく、園生活も生活発表会のことにも楽しみにしているようなので、お母さんがR君に「今年は生活発表会、大丈夫なの?」と尋ねてみると、

「今年は大丈夫だよ。タンポポ組(3歳児クラス)の時は可愛いダンスが嫌だったから行きたくなかったんだ。僕は、可愛いよりもかっこいい方が好きなのに、可愛いものを手に持って踊るのが本当に嫌だったんだ」と話してくれて、お母さんは「だから去年は、あんなにつまらなさそうに踊っていたのね。発表会が嫌だったわけでも練習を強要されることが嫌だったわけでもなかったのね」と納得したとのことでした。友だちは嫌がることもなく踊っているけれど、R君には気恥ずかしくて、気に入らないダンスだったのでしょう。

保育者は、自分がよかれと思って選んだテーマに子どもの気持ちに乗せていくことに熱心になりがちで、また幼児の表現活動は「可愛い」が、保護者にも好まれると思い込んでいることはないでしょうか。R君のように自分なりの美学があって、自分の感覚に合わないことには強い抵抗を感じる気持ちがしっかりあるということに、1年も経ってから気づかされたエピソードでした。



○ 保育者の成長

S先生は保育者経験年数9年目ですが、4歳児の1人の子どもとの関わりについてうまくいかなさを感じていました。乱暴な行為をするその子に言葉をかけると「うるせえ」「うぜえ」というような言葉が返ってきてどう関わったらよいか、わからなくなってきて困っていました。

そんなある日、研修会に参加しました。その研修会での講師の言葉の中から、自分の心に響いた言葉を書き留めました。

- ・大変な時こそ、その人の力がわかる。
- ・「できない、無理！」ではなく、「どうしたらできるか」という考えを持つことで、人生は変わる。
- ・完璧な人はいない。
- ・自分の良さを活かしながら考える。

この研修会の後、S先生は「言葉にはいろいろな伝え方があることにも気づかされて、否定的に関わることから違った感じ方ができるような伝え方を工夫することを意識するようになった」とのことです。

そして、ある日の朝のこと。「今日は、年長組のみんなで買い物に行きます」とS先生が子どもたちに伝えました。すると、一人の子どもが「〇〇君は話が聴けないから、お店の中に行ったら、お客さんたちに迷惑だから行かないよ」と言いました。その言葉を聞いて他の子どもも、「そうだね、完璧な人じゃないか

らね」と言いました。S先生はその時に、研修で学んだ言葉が頭の中にあったので、「先生は年長組のみんなで買い物に行きたい」こと、「友だちの苦手なところを、みんなでどう補ってあげたらよいかを考える人であってほしい」こと、「友だちのマイナス面ではなく、良いところを見つけてほしい」ことを伝えました。

そして、「先生も完璧ではないし、みんなも完璧ではないね。完璧な人は誰もいない」ということを伝えたそうです。

すると、子どもたちは、友だちの苦手な面を自分だったらどのようにフォローすることができるかを考え合うよい時間になったとのことでした。

S先生は研修での学びを通して、保育の大変さを感じた時に「できない、無理!」という保育者よりも、「どうしたらできるか」を考える保育者になりたいと思えたのです。そして、タイムリーなことに子どもたちが友だちに対して「完璧じゃない」と否定的な言葉を口にしたことで、S先生は、できないことや苦手なことがあって当然のこと、お互いの良いところを活かし合い、認め合うことの大切さを子どもたちに伝えることができました。おそらくS先生も、自分自身が完璧でないといけないという呪縛から解放されたことでしょう。その時の保育室のS先生や子どもたちの心地よい温かな空気感が伝わってくるようです。

○苦しい時にこそ関わりの中で



R君とS先生は、自分の望んでいることと異なったことが起こっている時の葛藤という点で共通点があります。

R君は、お母さんが必要以上にあるべき姿を押し付けなかったことで、「自分の気持ちを大切にしてくれる」という安心から思い通りにいかないことを受け入れる心の柔らかさと、自身の気持ちを表現できる言葉を手に入れました。S先生は、うまくいかない時に、自分の心もちのあり様とその意味を考えるきっかけを、研修を通して手に入れ、子どもたちとの関わりに活かすことができました。

子どもも大人も、1人では成長することはできず、苦しい時にこそ、人との関わり合いの中で心が育まれていくということですね。

保育通信 (2025年3月)より抜粋

